

## 研究に参加された方への研究結果のフィードバック

専修大学人間科学部心理学科教授の国里愛彦です。この度は、井上圭右さんの「社交不安と解釈バイアスの心理学的ネットワークの関連」での調査にご参加いただき、ありがとうございました（本調査の倫理申請番号は 20-ML197005-2 です）。以下が井上さんの研究概要と結果になります。こちらをもって研究結果のフィードバックとさせていただきます。以下の内容について、疑問点やより詳細な説明がお聞きになりたい場合は、国里愛彦までお問い合わせください。

### 研究の概要と結果

社交不安障害（社交不安症, Social Anxiety Disorder:SAD）とは、社交場面または人前で何らかのパフォーマンスを行う場面への強い恐怖・不安を感じる病気である（American Psychiatric Association, 2013）。社交不安における心理学的モデルは、Clark & Wells（1995）や Rapee & Heimberg（1997）、Hofmann（2007）の認知行動療法の基礎となる認知行動モデルに代表される。これらのモデルで共通するのは、社交不安の症状の維持において認知の偏りが生じているという点である。認知の偏りに関する研究では、解釈バイアス（interpretation bias）が注目され、その中でもコストバイアス（cost bias）と予測バイアス（probability bias）に焦点を当てた研究が盛んに行われている。このコストバイアスと予測バイアスは社交不安の維持に関与しており、Foa（1996）は、特にコストバイアスは社交不安の症状に強く影響し、その低減が社交不安の症状の改善に大きく関与すると指摘している。また、DSM-5における社交不安障害の診断基準の中に、「その恐怖が公衆の面前で話したり動作したりすることに限定されているといったパフォーマンス限局型場合、特定せよ」という文言が記述されている（APA, 2013）。他者の注視を浴びる可能性のある1つ以上の社交場面に対する、著しい恐怖または不安と記述されている。複数の社会的場面に対して著しく恐怖や不安を感じる原因の1つとして刺激般化（stimulus generalization）が考えられる。刺激般化は、直接強化されることなく、反応がどのようにして起こり始めるかを説明する有用な概念とされている。そのため、刺激般化のように社会的状況との間の関連性を考慮したアプローチが必要だと考えられる。刺激般化のような各社会的状況との間の関連性を考慮した分析方法として、心理学的ネットワークを提案する。心理学的ネットワークのアプローチによって、社交不安の維持に影響を及ぼす社会的状況における恐怖感・不安感や回避の症状を特定することも可能である。これらのことから、社交不安における心理学的ネットワーク有用であると考えられる。

本研究では、心理学的ネットワークの分析を行い、各社会的状況における症状の結びつきの強さ、社交不安の症状の維持に影響を及ぼす社会的状況における社交不安の症状の特定、解釈バイアスであるコストバイアス・予測バイアスの高低群で心理学的ネットワークの比較を探索的に検討するため、88名の大学生を対象に、調査研究を実施した。参加者はLSAS-J、SCOPの尺度をそれぞれGoogleフォームにて回答を行った。社交

不安における恐怖感・不安感のネットワーク，社交不安における回避のネットワーク，社交不安における恐怖感・不安感のネットワークの比較（コストバイアス高低群），社交不安における恐怖感・不安感のネットワークの比較（予測バイアス高低群），社交不安における回避のネットワークの比較（コストバイアス高低群），社交不安における回避のネットワークの比較（予測バイアス高低群）について GGM による推定および中心性指標を算出した。

その結果，それぞれのネットワークによって，各社会的状況における症状の結びつきの強さ，社交不安の症状の維持に影響を及ぼす社会的状況における社交不安の症状は異なっていた。解釈バイアスであるコストバイアス・予測バイアスの高低群で心理学的ネットワークの比較については，それぞれの解釈バイアスが高い方が低い方と比べ一部の社会的状況間の症状の関連性が強くなっており，ネットワーク全体に影響を及ぼしうる社会的状況については，高群と低群でそれぞれ異なることが示された。例外として，コストバイアスにおいては，高低群関係なく一部の社会的状況間の回避の関連性が強くなっていることを示した。本研究の日本人の社交不安における恐怖感・不安感や回避のネットワークの推定により，どの社会的状況が他の社会的状況に影響を及ぼしているかの特定や解釈バイアスの高低による社交不安のネットワークの変化は社交不安者へのアセスメントにおいて重要な知見である。しかし，ネットワーク内での因果的相互作用についての検討はできなかった点，2つ以上の社会的状況における恐怖感・不安感，回避の相互作用によって生じる現象の特定ができなかった点，サンプルサイズの関係により先行研究とは異なるネットワークの推定方法を用いた限界点を踏まえ，今後の研究では，横断調査だけでなく縦断調査によってネットワーク全体の因果関係を特定すること，社会的状況における恐怖感・不安感，回避の相互作用の現象を特定すること，サンプルサイズを十分に確保し，先行研究と同様の方法でネットワークを推定することが必要である。